

健叶とともに

北海道静内農業高等学校 生産科学科 3年 清水 悠花

「ラストコールになります。2,500万円より上のお声がけ、ありませんか…。2,500万円です！」

これは、本校で生産された1歳馬、「健叶(けんとう)」がサマーセールで購買していただいた金額です。落札が決まった瞬間、健叶とともに歩んできた日々が走馬燈のように頭の中を駆け巡り、それと同時に私たちの試行錯誤がようやく実を結んだことに涙しました。

中学3年生のころ、サマーセールの記事をインターネットで見ることがありました。「静内農業高校生産馬が520万円で落札された！」という内容の記事に関心し、競走馬の生産に興味を持ちました。乗馬クラブに通っていた私は、「私も生産に携わりたい！」という気持ちから、静内農業高校への入学を決めました。

私が学ぶ静内農業高校は、競走馬の生産が全国でも有名な日高郡新ひだか町にあります。軽種馬生産学習や乗用馬の利用をとおして、地域で行われている農業を学んでいます。軽種馬生産学習においては、毎年1,000頭以上の競走馬としてデビューを目指す1歳馬のセリ(サマーセール)に本校からも出場しています。近年のセールでは、7割の馬が売却され、3割の馬は買い手がつかないといった過酷なセリですか、馬主さん達に認めてもらえる馬を作るために研究を行っています。

高校入学後は、総合実習等の科目で、馬の基礎的な飼育管理について学び、2年生からの研究班活動に生かしています。高校生活に慣れてきた6月には、本校繁殖牝馬である「マドリガルスコア」への種付けが行われ、その様子を見学しました。種馬の選定には、JBB A(日本軽種馬協会)の遊佐場長に助言していただきました。「マクフィは現役時代に競馬の本場ヨーロッパでG1を2勝している。また、初年度産駒の出来が良いと評判が高く、今後活躍する可能性が高い。」とお話をいただいたことから、将来への期待をこめ、「マクフィ」を種馬として選定しました。受胎後、私たちは「ど

うか、お腹の中に宿った命が元気に生まれてきますように」と母馬のお腹を撫でながら願いました。その願いが通じたせいか日を追うにつれお腹は大きくなり、仔馬が順調に成長していることは誰の目から見ても明白でした。

そしていよいよ出産の日を迎えます。なかなか兆候が出ないため、下宿に帰宅した数時間後、「破水したよ！もう少しで生まれる！」と先生からの電話でした。急いで準備をして厩舎に向かいます。経産馬であるマドリガルスコアは破水から分娩までの時間が短いことを授業で教えてもらっていたため、着いたころには仔馬が生まれていることが想像できました。下宿先の管理人に車に乗せていただき、厩舎へ向かいます。車中では「仔馬が元気に生まれていればそれだけでいい」と願うばかりでした。厩舎に着き、恐る恐る馬房をのぞき込むと、細い足をガクガクと震わせながらも、何度も立ち上がろうとする仔馬の姿がありました。まるで母親になった気持ちで見守り、「私たちの手でこの子を立派な競走馬にするんだ」という強い決意が芽生えました。名付けは、育成に関わる私たちが考え、「健康に育ち、みんなの夢を叶えてほしい」という願いをこめ「健叶(けんとう)」としました。

生まれたばかりの健叶も競走馬としての馬生は始まっています。そんな健叶にセリまでの期間、私たちができる事は2つあります。そしてそれは、競走馬にとって重要な柱とされているものです。

1つ目は、競走馬としてレースで走るために必要な筋力をつける「運動」です。

健叶は母馬を交えた乗用馬4頭での集団放牧で運動量の確保を行っていました。放牧を開始してしばらくした頃、遊佐場長からこんな提案をしていただきました。「馬の運動量を知るためにGPSを活用してみてもどうか」というお話です。健叶がどれだけ運動しているのか知るのには最適な道具でした。GPS装着後、放牧地での運動量を分析してみると、JRA(日本中央競馬会)が推奨し

ている毎時 1 km 以上という基準を下回る毎時 0.8km の運動しかしていないことがわかりました。そこで私たちは、「元々サラブレッドとして生産された馬と一緒に放牧する方が、活発に運動するようになるのではないか」という仮説を立て、比較実験を行いました。乗用馬との放牧では毎時 0.8km の運動量だったのに対し、サラブレッドとの放牧では毎時 1.1km の運動量であると数値でわかる効果が見られ、運動量の確保に成功することができました。また、冬期に放牧地の足場が悪くなる時には、人為的な運動である引き馬を行い、健叶の運動量を補いました。

2 つ目は、体の内部やボディコンディションにも関わる「栄養」です。

健叶が生まれた時から見てくださっていた栄養コンサルタントの服巻さんに、栄養面のご指導をいただきました。「馬のボディコンディション、月齢に合った飼料の量、それを見極めることが大切です。」と助言をいただき、健叶の栄養面に向き合いました。健叶が離乳時から始めた、食べるトレーニングの効果もあり、計算した量の飼料を狙いどおりに摂取させることができました。1 カ月ごとに行っていたボディコンディションスコアでも、普通とされる「5」から、少し肉付きがよいとされる「6」の間を維持することができました。これはセリ前の馬にとって理想的なボディバランスとされています。このことから、私たちは健叶の栄養の管理ができたと言えます。

生まれてからの 1 年半の間、健叶のやんちゃ加減に苦悩する日々もありましたが、運動、栄養の管理を私たちが試行錯誤し、実践することで生産牧場としての役割を十分に果たすことができました。

そして、いよいよサマーセール前日の日を迎えました。健叶は一足先に会場入りしていたため、私たちは様子を見に馬房へと足を運びました。そこには慣れない環境に不安がる健叶の姿があったため、「競走馬としての最高の一步を踏み出させた

い」と願っていた私たちは、健叶の身体をさすりながら落ち着くのをひたすら待ちました。すると健叶も落ち着きを取り戻したのが、ようやく普段見せる仕草で応えてくれるようになりました。

そしてサマーセールが始まり、あっという間に健叶の番を迎えます。「上場番号 305 番。マドリガルスコア 2019」と健叶の上場名が呼ばれ、会場に姿を見せます。健叶に不安そうな様子はなく、堂々とした立ち姿を購買者にアピールしています。金額は 250 万円からスタートし、どんどん値段が上がっていきます。開始早々 500 万円を突破し、止まることなく声がかかり、1,000 万、1,500 万、2,000 万を超え、「ラストコールになります。2,500 万円より上のお声がけ、ありませんか…。2,500 万円です！」最終落札金額が会場に響いたとき、会場からはどよめきが起きそれはやがて私たちの努力をねぎらうような温かい歓声と拍手へ変わっていききました。健叶の成長を見守ってくださっていた地域の馬関係者の方からは「静農すごいね！」「よく頑張ったね！」と激励の声をかけていただきました。私たちが育てた健叶が、多くの馬主さんに認められ、高い評価をいただいたことに嬉しさや達成感のあまり、涙が止まりませんでした。競走馬としての第一歩を素晴らしい形で踏み出させることができたと言える瞬間でした。

私は高校卒業後、「馬と人間が共生できる社会作り」について研究したいです。その第一歩として東京農業大学へ進学をし、「動物介在療法」を学ぼうと思っています。今の日本社会で馬と人間の共生を実現させようとするのは、幻想なのかもしれません。しかし馬を利用した社会貢献を確立できれば、その幻想も現実のものとなるはずで。健叶とともに過ごした日々思えば、私はどんな困難も乗り越えることができます。育成牧場へ旅立った健叶が、競走馬の頂点を目指し一步一步進んでいくのと同時に、私も「人間と馬が共生できる社会作り」という夢にむけて、ひたむきに進んでいきます